

等位文の主語の省略

その他（別言語等） のタイトル	ELLIPSIS OF SUBJECT IN COORDINATE STRUCTURES
著者	橋本 邦彦
雑誌名	室蘭工業大学研究報告．文科編
巻	41
ページ	73-110
発行年	1991-11-11
URL	http://hdl.handle.net/10258/677

等位文の主語の省略

その他（別言語等） のタイトル	ELLIPSIS OF SUBJECT IN COORDINATE STRUCTURES
著者	橋本 邦彦
雑誌名	室蘭工業大学研究報告．文科編
巻	41
ページ	73-110
発行年	1991-11-11
URL	http://hdl.handle.net/10258/677

等位文の主語の省略

橋 本 邦 彦

ELLIPSIS OF SUBJECT IN COORDINATE STRUCTURES

KUNIIHIKO HASHIMOTO

Abstract

There are two types of coordinate structure in Mongolian (Khalkha dialect), that is, the one formed by \dot{j} / \dot{c} suffixes and the other formed by $-aad$ / $-eed$ / $-ood$ / $-ööd$ suffixes. The purpose of this paper is to observe the ellipsis phenomenon of subjects occurring in these coordinate structures and explicate some principles governing the subject elision. Section 2 presents the distribution of occurrence of subjects in terms of coreference and then formulates semantic principles as well as syntactic ones. Section 3 demonstrates the fact that discourse principles play an important role in the subject ellipsis. Section 4 leads us to the conclusion that the subject appearance of coordinate sentences is explained exhaustively on the basis of three different aspects, including syntax, semantics, and discourse analysis.

1. はじめに

モンゴル語の等位文は、典型的に、 \dot{j} / \dot{c} ¹⁾と $-aad$ / $-eed$ / $-ood$ / $-ööd$ ²⁾以後、 aad ⁴⁾と略記) の二つの副動詞接尾辞 (converbal suffixes) により形成される。これらの接尾辞は、最右端の等位節の動詞語幹に付いて、先行節と後続節とを連結する。

(1) a. c_1 [Bi üdees xojš nomijn delgüürt očij] c_2 [nom

lsg afternoon book-G store-D / L go-COOD. CNV book- ϕ
avlaa].

buy-PST

"I went to the book store and bought a book this afternoon."

- b. c_1 [Ene ögүүлberijg devtertee bičeed] c_2 [unš].

this sentence-ACC notebook-D / L-RFL write-COOD. CNV read- ϕ IMPRTV

"Write this sentence on your notebook and read (it)!"

- c. c_1 [Bilig nomijn sand gurban tsagaas jaaxan ömnö xürčee]

library-D / L three time-ABL / a bit before get to-COOD. CNV

c_2 [orood] c_3 [Dulmaag xüleejee].

enter-COOD. CNV -ACC wait-PRF

"Bilig got to the library a bit earlier than 3 o'clock and entered (there) and waited for Dulmaa."

(1a, b) は C_1 の動詞語幹に \dot{j} と $-aad^4$ がそれぞれ付いて C_2 と連結している。 \dot{j}/\dot{c} も $-aad^4$ も二つ以上の節を結び合わせて等位文を作り、しかも、両者は同一文中で共起し合えるので、(1c) のように、三つの節からなる文も存在する。 \dot{j}/\dot{c} と $-aad^4$ は、それ自体、テンス、アスペクト、モダリティ（以後、TAM と略記）をもつことはできず、必ず、最右端の節に付加されている TAM と一致する。したがって、(1) の等位文を連結させずに独立した単文に分けるなら、次のような文になるであろう。

- (2) a. S_1 : Bi üdees xojš nomijn delgüürt očloo.

S_2 : Bi nom avlaa.

- b. S_1 : Ene öguulberijg devtertee bič.

S_2 : Unš.

- c. S_1 : Bilig, nomijn sand gurban tsagaas jaaxan ömnö xürčee.

S_2 : Ter_i (tend) orčee.

there

S_3 : Ter_i Dulmaag xüleejee.³⁾

(2a) の S_2 の動詞語幹には、TAM 要素として過去形接尾辞 $-1aa^4$ が付いているので、 S_1 の動詞語幹にも同じ接尾辞を当てることができる⁴⁾。

(2b) の S₂の動詞は、形の上では語幹のままのゼロ接尾辞であり、二人称の命令形を表示する。それゆえ、S₁も当然命令文ということになり、動詞語幹はゼロ接尾辞をとる。

(2c)は三つの単文に分割され、その各々の動詞語幹に、S₃の動詞の完了形接尾辞 -jee / -čee が分配される。

このように、対等な T A Mをもつ文が、-j / -č や -aad⁴を介して連結する時に、(1)のような適切な等位文が得られるのである。別の言い方をすると、異なる T A Mをもつ文同士が等位文を構成することはないのである。

(3) a. S₁: Bi üdees xojš nomijn delgüürt očno.

go-NPST

S₂: Bi nom avlaa.

buy-PST

*S₁ + S₂

b. S₁: Či ene ögüülberijg devtertee bičiv.

2sg

write-PST

S₂: Unš.

read- ϕ IMPRTV

*S₁ + S₂

c. S₁: Biligi nomijn sand gurban tsagaas jaaxan ömnö xürex

get to-ADJ.

VN

xeregtej.

be necessary

S₂: Ter_i(tend) orno.

go-NPST

S₃: Ter_i Dulmaag xüleejee.

wait for-PRF

*S₁ + S₂ + S₃

(3 a)では非過去形と過去形を、(3 b)では過去形と命令形を、(3 c)では義務のモダリティと非過去形と完了形が、それぞれの単文中に含まれている。これらの互いにTAMの異なる文を等位接続させることは禁じられる。

(1)、(2)、(3)から、等位文のTAMについて、次のような原則をたてることができる。

(4) TAM依存の原則：

等位文を構成する各等位節のTAMは、最右端の等位節のTAMに依存する。

本稿の目的は、以上の特徴を備えた等位文の主語の省略を観察し、その実相を明らかにするところにある。

第2節で主語の省略の分布を同一指示性との関係から観察し、統語上の原則と意味上の原則を折出していく。第3節では、談話上の原則が主語の省略に重要な役割を果たしていることを実証する。第4節は、第2節と第3節での考察を簡潔にまとめ、等位文の主語の省略は、統語レベル、意味レベル、談話レベルの三つの異なるレベルで働く諸原則が相互に機能しあってはじめて余す所なく説明できると主張する。

2. 等位文の統語論と意味論

2. 1. 等位文の統語論

-j / -č と -aad⁴ は、前半の等位節にだけ顕在的な主語をおくことができる⁵⁾。

(5) a. Bi_i xaaya Ulaanbaatar xotijn nomijn sand očij

lsg sometimes Ulan Bator city-G library-D / L go-COOD. CNV

e_i nom unšdag.

book - ϕ read-HBT

"I sometimes go to the Ulan Bator City Library and read a book".

b. Dorj_i buudlijn tasalgaandaa orood e_i nūūr

hotel-G room-D / L-RFL enter-COOD. CNV face-ϕ

garaa ugaav.

hand-RFL wash-PST

“Dorj entered his room of the hotel and washed his face and hands.”

(5 a、b)とも主語は前半節にだけ出現しており、後半節はゼロ主語(“e”で表記)である。この場合、ゼロ主語は前半節の主語と同一指示的であると解釈されなければならない。同一指示関係が破られると、次のような不適格な文が生じてしまう。

(6) a. *Bi_i xaaya Ulanbaatar xotijn nomijn sand oči_j e_j nom unšdag.

“I sometimes go to the Ulan Bator City Library and (someone else) reads a book.”

b. *Dorj_i buudlijn tasalgaandaa orood e_j nūr garaa ugaav.

“Dorj entered his room of the hotel and (someone else) washed his / her face and hands.”

(5)とは対称的に、前半節にゼロ主語、後半節に主語の現れる等位文に関しては、-j / -č と -aad⁴ との間に、適格性の違いが観察される。

(7) a. *e_i surguulid ir_j Bilig_i mongol xel sursan.

school-D / L come-COOD. CNV Mongolian -ϕ study-PRF .VN

“Bilig came to school and studied Mongolian.”

b. e_i undaa uučixaad xoyuul_i deer

beverage-ϕ drink-PRF-COOD. CNV two persons above
davaxraas doošoo buuv.

floor-ABL downward go down-PST

“The two persons drank up some beverages and went down from the above floor.”

(7 a)の -j / -č 型等位文は不適格であるが、(7 b)の -aad⁴ 型等位文は適格である。(7 b)の適格性もゼロ主語と主語との間の同一指示性によって保証されており、この関係が成立しなければ、適格な文を得ることはできない。

(8) *e_i undaaa uučixaad xoyuul_j deer davxraas doošoo buuv.

“(Someone else) drank up some beverages and the two persons went down

from the above floor.”⁶⁾

では、前後節双方に同一指示的な主語が現れている場合は、どうだろうか。

- (9) a. *Noxo_ji angijn mōrijg mōrdōj noxo_ji /
 dog animal-G footstep-ACC follow-COOD. CNV
 ter_i oj ruu orov.
 3sg forest toward enter-PST
 “The dog followed the animal’s footsteps and the dog / it
 went into the forest.”

- b. *Davaa_i Dorjtoj uulzaad Davaa_i / /ter_i ix
 -CMT meet-COOD. CNV very
 bayasav.
 be glad-PST

“Davaa met Dorj and Davaa / he was very glad.”

前半節の主語と同じ形の主語を後半節で繰り返し用いても、あるいは、その代わりに同一指示的な代名詞を置いても、適格な文を得ることはできない。容認できる文にするには、後半節の主語を義務的に省略しなければならない。

- (10) a. Noxo_ji angijn mōrijg mōrdōj e_i oj ruu orov.

- b. Davaa_i Dorjtoj uulzaad e_i ix bayasav.

前半節と後半節に非同一指示的な主語が現れると、-j / -č 型等位文と -aad⁴ 型等位文との間に適格性の違いが出てくる。

- (11) a. Xonx_i duugarč xičeel_j exlev.

bell ring-COOD. CNV lesson begin-PST

“The bell rang and the lesson began.”

- b. *Bilig_i kafend orood Dulmaa_j tendees
 coffee shop-D / L enter-COOD. CNV there-ABL
 garav.
 go out-PST

“Bilig went into the coffee shop and Dulmaa went out from there.”

(11 b) に見るように、 $-aad^4$ の前後の節に異なる主語が現れている場合、容認し難い文が生じる。このような文を救うためには、 $-aad^4$ を $-xad^4$ のような副詞節に置き換えなければならない。

- (12) Biligijg kafend oroxod Dulmaa tendees garav.⁷⁾
 -ACC enter-ADJ. VN-D / L

“When Bilig went into the coffee shop, Dulmaa went ont from there.”

他方、 $\check{j} / -\check{c}$ の前後の節では、(11 a) に示すように、異なる主語をおくことができる。

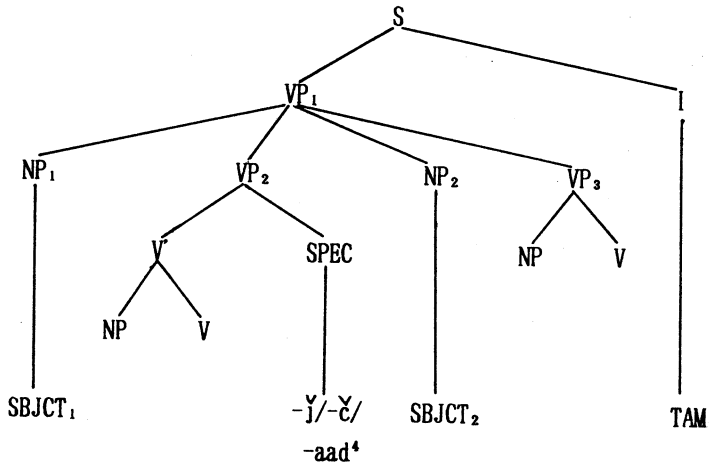
これまでの観察を、主語／ゼロ主語の分布と同一指示性の視点から表にまとめると、次のようになる。

- (13)
- | | $\check{j} / -\check{c}$ | $-aad^4$ |
|------------------------|--------------------------|----------|
| a. $S_i + \emptyset_i$ | OK | OK |
| b. $S_i + \emptyset_j$ | OUT | OUT |
| c. $\emptyset_i + S_i$ | OUT | OK |
| d. $\emptyset_i + S_j$ | OUT | OUT |
| e. $S_i + S_i$ | OUT | OUT |
| f. $S_i + S_j$ | OK | OUT |

(13 a - f) の各項を、等位構造に働く束縛関係から解き明かしていくことにする。

モンゴル語の等位文の構造を設定すると、次のようになる。

(14)



モンゴル語の等位文を構成する節の主要部はVである。前半節と後半節の主語を支配するNP節点は、節内ではなく節外の最上位のVP₁に直接支配されている。このVP₁が、今度は、TAMを支配するIにより統率されることになる。このIによる統率は、TAM依存の原則(4)を直接的に反映しているといっよう。8)

等位節を連結する-j/-c及び-aad⁴を支配する範疇の正体はよくわからないが、統率の障壁要素(barrier)とはならないので、ここでは「指定部(Specifier)」であると考えことにする。

(14)の統語構造のもつ意味合いは、Chomsky (1981) 以来のGB理論の枠組みに当てると一層鮮明になる。GB理論はいまだ完成の途上にあり、種々の原則とその代案が提案されている状況にあるので、直接の議論に関連する束縛の定義と原則にのみ言及する。

「束縛(Binding)」は次のように定義される。

(15) The Definition of "Binding":

α binds β iff α and β are coindexed and α c-commands β .

「C統御(C-Command)」は、文の統語関係をとらえる上で重要な概念である

が、Reinhart (1983) に従うと、次のように定義される。

(16) The Definition of "C-Command" :

A node A c(constituent)-commands a node B iff the first branching node α that dominates A either dominates B, or is immediately dominated by a node α' which α and α' are of the same category type (e. g. S and S').

束縛関係は、NP の統語上の性格づけを明確にしてくれる。それを規定したのが「束縛条件 (Binding Conditions)」である。

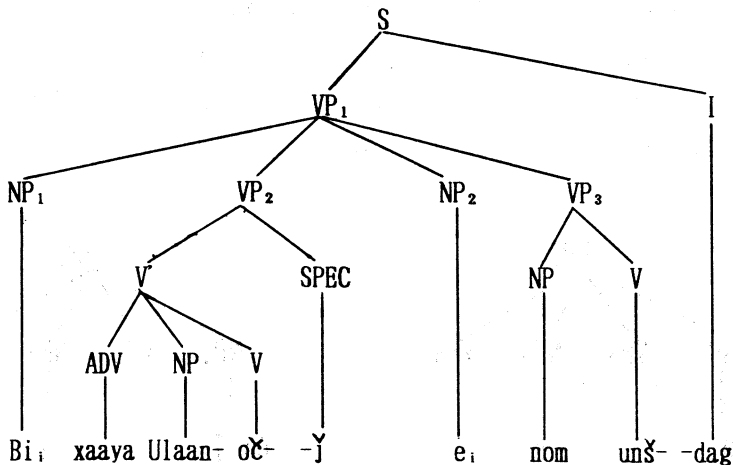
(17) Binding Conditions:

- a. An anaphor is bound in its governing category.
- b. A pronoun is free in its governing category.
- c. R-expression (e. g. name, definite NPs) is free.

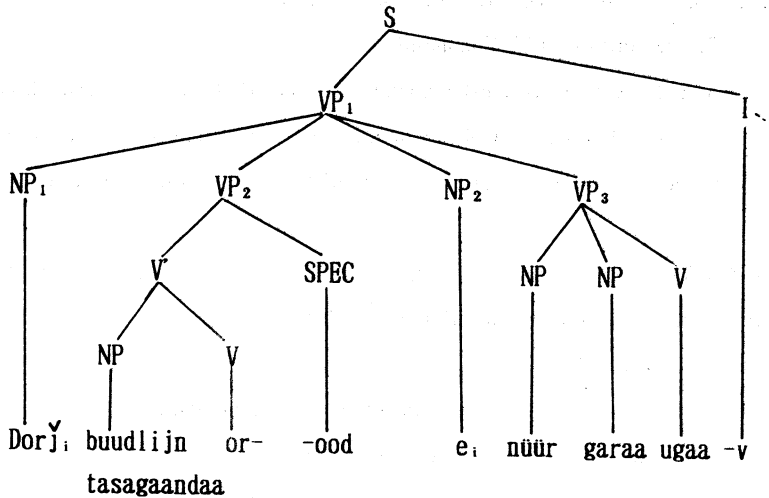
さて、いよいよ、(15)–(17)で規定された束縛関係を採用しながら、(13 a – f) の分析に着手していくことにしよう。

(13 a) は、前半節に顕在的な主語、後半節に同一指示的なゼロ主語が現れる場合である。その具体例である(5)の統語構造は、次のようになる。

(18) a.



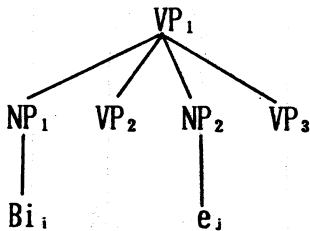
b.



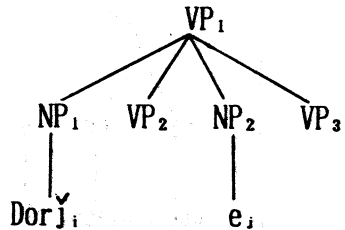
NP₁の下の主語とNP₂下の空要素eとは同一の指標をもっており、しかも、NP₁はNP₂をC統御している（NP₁を支配している最初の枝分かれ節点VP₁がNP₂をも支配している）。(15)によりNP₁はNP₂を束縛し、(17a)より、空要素eは、非語彙的な照応語であることがわかる。NP₁とNP₂との間に束縛関係が成立するので、NP₁にさえ顕在的な主語がおかれていれば、NP₂の下に同一指示的な主語が現れる必要はないのである。

後半節に非同指示的なゼロ主語のくる(13b)の不適格性も、(13a)の路線に沿って説明することができる。詳細な点を省いて、(13b)の具体例である(6)の統語構造を記すと、次のようになる。

(19) a. *



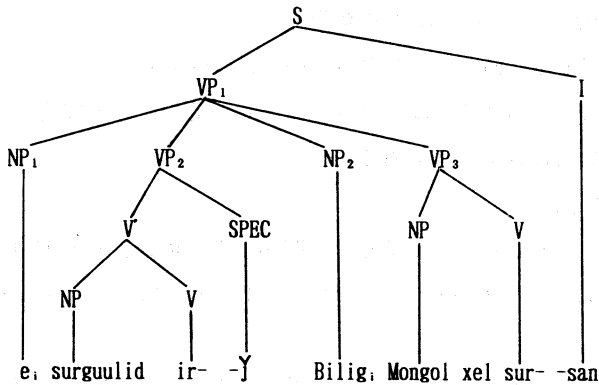
b.



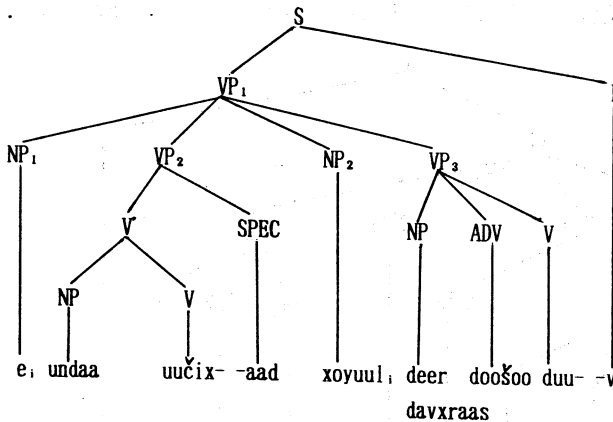
NP_1 と NP_2 とは束縛関係にあるにもかかわらず、その支配下の主語と空要素 e は、同一の指標を共有していない。束縛される空要素は必ず照応的でなければならないから、(19)のような文は、不適格なものとして排除される。

(13a)とは対称的なゼロ主語の分布をもつ(13c)のような場合は、どうであろうか。その具体例は、(7)として提示されていた。

(20) a. .



b.



NP_1 下の空要素 e と NP_2 下の主語とは、同一の指標を共有し、 NP_2 は NP_1 をC統御しているので、 NP_2 は NP_1 を束縛する。しかも、 e は(17a)から非語彙的な照応語としての身分を保証され、(20)の構造をもつ文はすべて適格

であると判定されるはずである。ところが、-aad⁴を連結子とする(20 b)は適格であるのに対し、-j / -čを連結子とする(20 a)は不適格となる。(20 a)の不適格性は、実は、意味上の特有性によるものと考えられるが、その詳細については後述する。

N P₁下の空要素 e と N P₂下の主語とが同一指標を共有しない(13 d)の場合は、(13 b)の場合と全く同じ理由から退けられる。

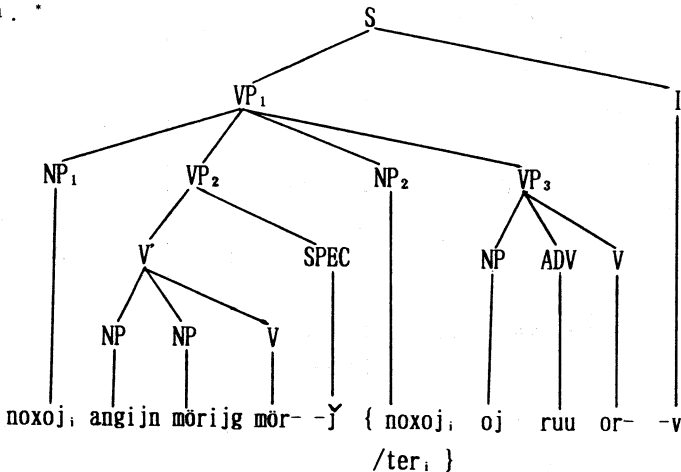
(13 a - d)の分析で明らかなように、(14)の構造をもつモンゴル語の等位文では、N P₁は N P₂を C 統御すると同時に、N P₂も N P₁を C 統御するという相互 C 統御の関係が成立する。このような環境では、同一指示的な主語の実現形は、どちらか一方の下に現れればよいのである。

(21) 主語の差押えの原則：

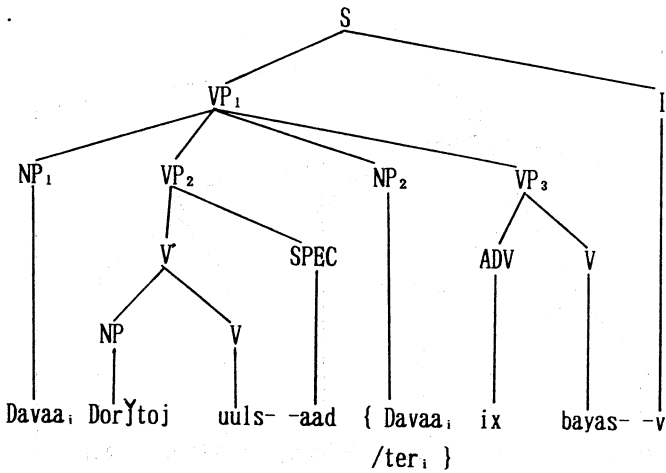
同一指示的な主語 N P が相互に C 統御し合う関係にある場合、その実現形は、どちらか一方の N P の下に現れればよい。残りの NP の下には、非語彙的な照応語 e がおかれる⁹⁾。

差押えの原則は、(13 e)のような、どちらの N P にも同一指示的な主語が実現する場合の不適格性をも説明してくれる。一例として、(9)の構造を記す。

(22) a . *



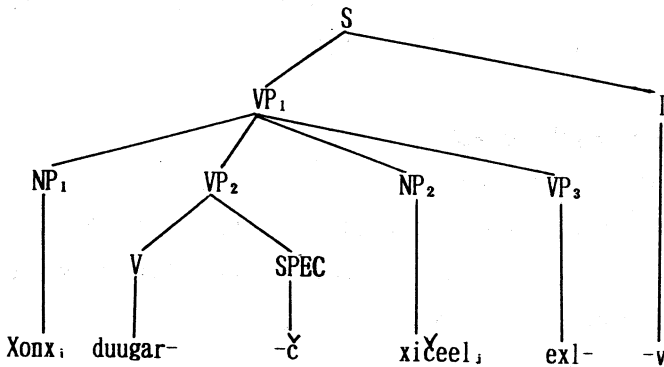
b.



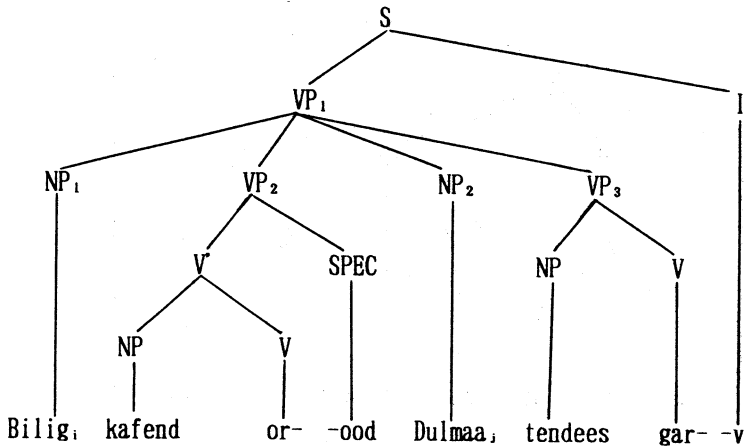
NP₁とNP₂は同じ指標を共有し相互にC統御し合う関係にあるので、どちらか一方にだけ実現形が現れればよいのにもかかわらず、どちらにも現れてしまっている。これは原則(21)に違反するので、不適格と判定される。

NP₁とNP₂が同一の指標を共有しない(13 f)の場合は、(13 e)とは異なる適格性の判定を受ける。具体例として、(11)の統語構造をあげる。

(23) a.



b. *



NP₁にもNP₂にも固有の指示性をもった非同一指示的な名詞が現れている。(17c)により、このような名詞は、いかなる統語上の環境の中でも束縛から常に自由であるのだから、差押えの原則(21)には抵触しない。それゆえ、(23a、b)はどちらも適格な文とみなすことができるはずである。ところが、 $\dot{j} / \text{-}\dot{c}$ 型の等位文(23a)は適格であるのに対し、 -aad^4 型の等位文(23b)は不適格である。

この理論上の予測と言語事実とのずれは、(20a)の場合と同様に、統語論の枠組みだけをみているのでは説明することができない。実は $\dot{j} / \text{-}\dot{c}$ と -aad^4 の意味論が(20a)と(23b)の不適格性に深く関与しているのである。

2. 2. $\dot{j} / \text{-}\dot{c}$ と -aad^4 の意味論

Luvsanjav(1976)や小沢(1986)は、 $\dot{j} / \text{-}\dot{c}$ が「二つの行為が同時的に、もしくは、連続的に起こることを表す。」のに対し、 -aad^4 は「ある行為が先に生じ、次に、他の行為が起こることを示す。」と説明し、両者の意味を明確に区別している¹⁰⁾。この説明は、以下に列挙する例から見ても、正しいように思われる。

(24) a. Ter xün end suuj tsaj uuv.

that man here sit-COOD. CNV tea-Ø drink-PST

"That man sat here and drank tea."

b. Dūū zurag zurj bi radio sonosloo.
 younger brother picture-Ødraw-COOD. CNV lsg radio-Ø listen to-
 PST

“My younger brother drew a picture, and I listened to the radio.”

(24 a、b) は -j / -ɛ 型の等位文である。(24 a) は二つの行為が切れ目なく連続して起こったことを示し、行為の主語は一つである (e. i. ter xün)。一方、(24 b) は二つの異なる行為が同時に起こったことを表し、行為の主体は二つである (e. i. dūū, bi)。-j / -ɛ の果たす行為の同時性、連続性が更に際立たせられると、英語の進行形に似た構造を作る役割を演ずるに至る。

(25) a. Aav tsaj uuĵ bajlaa.
 father tea-Ø drink-COOD. CNV be-PST

“Father was drinking tea.”

a'. Aav tsaj uulaa.
 drink-PST

“Father drank tea.”

b. Bat radio sonsoĵ bajv.
 radio-Ølisten to-COOD. CNV be-PST

“Bat was listening to the radio.”

b'. Bat radio sonsov.
 listen to-PST

“Bat listened to the radio.”

(25 a、b) の「-j / -ɛ + baj」表現と、対応する (25a',b') の単純過去／完了表現の意味を比較すれば、-j / -ɛ の役割は一目瞭然である。Luvsanjav(1976) は、「-j / -ɛ + baj (過去時制) の形は、過去の具体的な期間に、ある行為が続いていたことを示す。」と述べている。

(26) a. Bi surguulyaa tögsööd ödöö suuna.
 lsg school-RFL finish-COOD. CNV countryside live-NPST

“I'll finish my school and live in the countryside.”

- b. Minij najz Ulaanbaatart öčigdör ireed öñöödör yavlaa.
lsg-G friend Ulan Bator-D / L yesterday come-COOD. CNV today go-PST
“My friend came to Ulan Bator yesterday and left (there) today.”
- c. Öñöödör bi emätejgee uulzaad irsen.
today lsg doctor-CMT-RFL meet-COOD. CNV come-PRF. VN
“Today I came and met my doctor.”

(26 a - c) は -aad⁴ 型の等位文であるが、一つの行為が完了した後に次の行為が生じるという継続性が明確に描かれている。

-j / -č と -aad⁴ が固有に備えている意味特性を明示すると、Luvsanjav(1976) や小沢(1986) の主張は、次のように改訂できる。

(27) -j / -č と -aad⁴ の意味特性：

- a. -j / -č: 一つの行為／事態の連続性か、異なる行為／事態の同時性を表示する。
- b. -aad⁴: 一つの行為／事態の継起性を表示する。

これらの意味特性から導き出せる論理的帰結として、-j / -č は、同一の行為／事態の主体だけではなく、異なる行為／事態の主体をもつことができるのに対し、-aad⁴ は同一の行為／事態の主体しかもち得ないのである。

(27) は (13 c) の -j / -č 型等位文と (13 f) の -aad⁴ 型等位文のそれぞれの不適格の理由を説明してくれる。

(28) (= (7 a))

- a. *e_i surguulid irj Bilig_i mongol xel sursan.
- b. Bilig_i suguulid irj e_i mongol xel sursan.

(28 a) は、e_i + SBJCT_i の文で、統語上の束縛関係から許されるはずであり、事実、-aad⁴ 型等位文では適格である。-j / -č 型等位文で許されないわけは、-j / -č の連続性という意味特性が、行為／事態の発生の時点での主体の存在の明記を要求するからである。したがって、その要求を満たした(28 b) は、意味特性から見ても（もちろん、統語上の原則から見ても）適格な文ということができる。

(29) (= (11 b))

a. *Bilig_i kafend orood Dulmaa_j tendees garav.

b. Bilig_i kafend orood e_i tendees garav.

c. e_i kafend orood Dulmaa_i tendees garav.

(29 a) は SBJCT_i + SBJCT_j の文で、前後節の各々の主語は非同指指示的であり、束縛から自由であり、適格と判定されるはずである。実際、 \check{j} / \check{e} 型等位文では申し分のない文を生成する。許されない理由は、 $-aad^4$ のもつ行為／事態の継起性という意味特性が、一つの同じ主体（それが単数であっても複数であてもよい）を要求するからである。したがって、この要求を満たした (29 b、c) は、意味特性から見て（もちろん、統語上の原則から見ても）適格な文となる。

\check{j} / \check{e} と $-aad^4$ の意味性(27)は、束縛関係という統語上の原則に対して、一種のフィルターの働きをしているということができよう。

3. pro と談話の原則

3. 1. pro と再帰所有接尾辞

第2節では、少なくとも前半節か後半節のどちらか一方に主語の現れる等位文を考察した。モンゴル語には更に興味深い例として、どちらかの節にも主語の現れない等位文を見つけ出すことができる。

- (30) a. _{s1}[[Suragč buxen]_i nom unsij, e_i bičig
student all book- \emptyset read-COOD. CNV composition- \emptyset
bičij čaddag bolov].
write-COOD. CNV be able to-HBT become-PST
_{s2}[Bas e_i suleg uran unšij e_i duu duuldag bollool.
moreover poem- \emptyset recite-COOD. CNV song- \emptyset sing-HBT become-PST
“All the students_i came to be able to read a book and write composition.
Moreover, (they_i) came to recite a poem and sing a song.”
- b. _{s1}[Bid_i Batiyn tasgaas garč, e_i nomijn

1pl -G room-ABL go out-COOD. CNV book-G
delgüürt očloo].

store-D / Lgo-PST

s₂[Tendeess e_i xeden nom avaad e_i surguuli
there-ABL a few book-ø buy-COOD. CNV school-ø
ruu yavav].

toward go-PST

"We_i left Bat's room and went to the book store. There (we_i) bought several books and went to school."

(30 a、b) は二つの文でできている談話でもある。後続文 S₂ は、等位文であるが、先行文 S₁ とは違って顕在的な主語を全くもっていない。このタイプの等位文は、前半節と後半節のゼロ主語が同一指示的である場合にのみ出現が許され、互いに異なる指示対象をもつようになると、適格な文は得られなくなってしまう。

(31) a. *s₁[Dulmaa_i xotijn tövd xüreed e_i Dorjtoj
city-G center-D / L get to-COOD. CNV-CMT

uulzav]. s₂[Tegeed e_{ij} nomijn delgüürt orj

meet-PST then book-G store-D / Lenter-COOD. CNV

e_j mongol xelzün surax bičig avlaa].

Mongolian grammer-G textbook-ø buy-PST

"Dulmaa_i got to the center of the city and met Dorj_j. Then (Dulmaa_i and Dorj_j) entered the book store and Dorj_j bought a Mongolian grammar book."

b. ? s₁ [Dulmaa_i xotijn tövd xüreed e_i Dorjtoj_j uulzav].

s₂ [Tegeed e_{ij} nomijn delgüürt orj e_{ij} mongol xelzün surax bičig avlaa].

c. s₁ [Dulmaa_i xotijn tövd xüreed e_i Dorjtoj_j uulzav].

s₂ [Tegeed e_i nomijn delgüürt orj e_i mongol xelzün surax bičig avlaa].

それぞれ、S₂ のゼロ主語 e の解釈に注目していただきたい。(31 a) の S₂ の

前半節のゼロ主語は、先行文に現れている二つの名詞 “Dulmaa” と “Dorj” と併せて指示しているのに対し、後半節のゼロ主語は、“Dorj” のみを指示していると解釈される。 \dot{j} / \dot{e} 型の等位文の前後の節には、指示対象の異なる主語をおくことができるはずである。しかしながら、このような解釈を要求する (31 a) は、不適格と判定される。

(31 b) は、前後節双方のゼロ主語とも、先行文の二つの名詞を併せた形の指示をもっている。このタイプの文の容認性の度合いは、(31a) よりは高いが、完全に容認できるわけではない。

(31 c) は、先行文 S_1 主語が S_2 でも一貫してゼロ主語の指示対象となっている。この種の文は、申し分のない文である。

(30)、(31)の観察から、次のような制約を設定することができる。

(32) 等位文の前後節ともゼロ主語の場合、それらは必ず先行文の主語と同一指示的でなければならない。

この制約は、論理的に、前後節のゼロ主語同士も同一指示的であることを含意している。

さて、次に問題となるのは、 S_2 のゼロ主語 e の中身は何かということである。GB 理論の展開の中で、主語の省略される言語は、pro-drop 言語と位置づけられている。Huang(1984) によれば、pro-drop の生ずる言語は、次の二つのタイプに分類できる。

(33) a. there is a rich agreement element, e. g. Italian, Spanish, etc.

where there is an Agr rich enough to identify the content of a zero subject.

b. there is no agreement at all, e. g. Chinese, Japanese, etc.,

where a zero subject pronoun is identified by an NP in a superordinate clause.

-Huang(1984:557)

この分類に従うと、モンゴル語は、中国語や日本語と同様に、一致素性をもたない (33 b) タイプの言語であるということになる。ここで zero subject pro-

noun を表す *pro* は、Jaeggli and Safir(1989)などで、[+pronominal, -anaphoric]の素性をもつ代名詞的な空要素として規定されている。では、(31)の S_2 に現れる空要素も *pro* として認定してよいのだろうか。

実際、顕在的な主語の全く存在しない等位文の空要素の少なくともどちらか一方が、代名詞的であるという積極的な証拠があるのである。

モンゴル語には、所有／帰属関係を示す手段の一つとして、再帰所有接尾辞 *-aa*⁴ (以下、RFLと略記)がある¹¹⁾。RFLは、所有／帰属の対象となる名詞的要素に直接付加されるが、その先行詞は文／節の主語である。

(34) a. *Dulmaa_i Dorjoor_j dasgalaa_i xijlgejee.*

-INSTR homework-RFL do-CSTV-PRF

“*Dulmaa_i made Dorj_j do her_i / *his_j homework.*”

b. *Dorjijg_i gertee_i irexed [xüüxed ni]_j untsan bajlaa*

-ACC house-D / L-REL come-ADJ. VN child his sleep-PRF. VN

be-PST

“*When Dorj_i came back to his_i / *j_jhouse, his child_j had been sleeping.*”

c. *Namajg_i irexed düü_j xooloo_j ideed bajv.*

lsg-ACC come-ADJ. VN younger brother meal-RFL eat-COOD. CNV.

“*When I_i came back, my younger brother_j had eaten* my_i / his_j meal.*”

d. *Batbayar_i gerees garaxdaa_i üüdee_i xaasangüj.*

house-ABL go out-ADJ. VN-D / L-RFL door-close-PRF. VN-

RFL not

“*When Batbayar_i went out of the house, (he_i) didn't close his_i door.*”

(34 a)は使役文であり、意味上、使役者(文全体の主語)と被使役者(語幹動詞の行為者)の二つの行為者を持ち、それぞれ、主格形NPと具格形NPとして実現している。このうち、RFLの先行詞になれるのは、使役者である文全体の主語に限られる。

(34 b - d)は *-xad*⁴に導かれた副詞節を含む文である¹²⁾。

(34 b)では副詞節にのみRFLが出現しているが、その先行詞は当の副詞節

の主語であって、主節の主語ではない¹³⁾。反対に、(34 c) は主節にだけ R F L があるが、その先行詞は主節の主語であって、副詞節の主語ではない。(34 d) は、副詞節と主節とが同一の主語に支配され、どちらの節にも R F L が現れているが、その先行詞はすべて文頭の主語と一致する。

R F L は、照応的要素であるが、文か節の主語を先行詞とする。もっと言うならば、この主語によって束縛されるのである。

(35) 再帰所有接尾辞にかかる制約：

R F L は同一文／節中の主語により束縛されなければならない¹⁴⁾。

では、(35) を念頭において、次の文を観察してみよう。

- (36) a. _{s1} [Bilig_i öcigdör üdees ömnö muzej üzej̃, daraa ni
yesterday morning museum- \emptyset see-COOD. CNV then
e_i delgüürt oçloo]. _{s2} [e_i üdijn xooloo_i gertee_i
store-D / L go-PST lunch-RFL house-D / L-RFL
ideed e_i üdees xojš xiçeele_e_i davtlaa].
eat-COOD. CNV afternoon lesson-RFL review-PST
“Bilig_i saw a museum and then went to the store in the morning yesterday. (Bilig_i) had his_i lunch at his_i house and reviewed his_i lesson in the afternoon.”

- b. _{s1} [Bi_i odoo yavyaa]. _{s2} [e_i tasagtaa_i oçĩ] e_i
1sg now go-VLNT room-D / L-RFL go-COOD. CNV
nomoo_i tavina].
book-RFL put-NPST

“Let me go now. (I'll) go to my room and put my book (there).”

(36 a, b) の S₂ には主語が全くないにもかかわらず、R F L が現れている。R F L の先行詞が同一文／節中の主語であるならば、等位文中の空要素の少なくとも一つは、先行詞としての資格を備えた指示性のある代名詞的要素 pro でなければならない。

この pro の統語構造での出現の場所については、次の三つの候補をあげるこ

とができる。

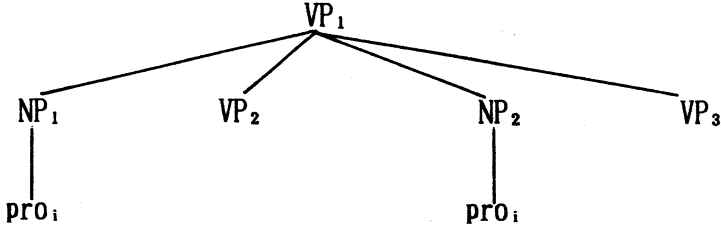
(37) a. 前半節の主語 (NP₁) の位置

b. 後半節の主語 (NP₂) の位置

c. 前後節の主語の位置

このうち (37c) は、束縛条件 (17b) より容易に除外することができる。

(38)*

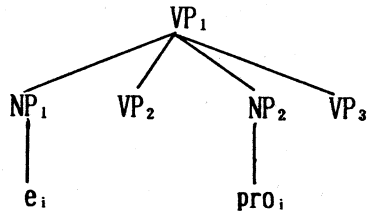
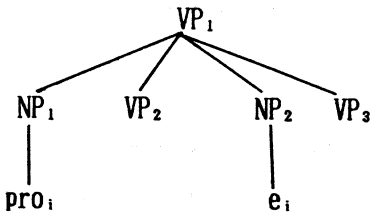


pro は代名詞的な空要素であるから、VP₁内で自由でなければならない。ところが、NP₁とNP₂とは相互にC統御する関係にあり、NP₁のproはNP₂のproを束縛すると同時に、NP₂のproもNP₁のproを束縛する結果になる。

NP₁とNP₂との間に適切な束縛関係を成立させるためには、(37a, b)であげたように、proをNP₁かNP₂のどちらか一方にだけおき、残りのNPには照応的な空要素をもってくるのが妥当な解決策のように思われる。

(39) a.

b.



どちらの形も等しく可能な選択肢であるが、(39a)のようにNP₁がproを支配する構造が無標であると言える。

(40) a. Bi ūdees ömnó gertee_i suuj, e_i düüdee_i

1sg morning house-D / L-RFL stay-COOD. CNV younger

brother-D / L-RFL

zurag zurj öglöö.

picture-Ø draw-COOD. CNV give-PST

"I stayed at my house in the morning and drew a picture for my younger brother."

b. Dorj_i tendees ireed e_i xooloo_i xijlee.

there-ABL come-COOD. CNV meal-RFL make-PST

"Dorj_i came from there and cooked his_i meal."

主語が現れる場合、無標の文では、(40 a, b)のように、その主語はNP₁に支配される。後半節の主語は差し押さえられており、そこに存在するRFLは、NP₂のeを経由してNP₁の主語を先行詞とする。

(41) a. *e_i üdees ömnö gertee_i suuj, bi_i düüdee_i zurag zurj öglöö.

b. e_i tendees ireed Dorj_i xooloo_i xijlee.

後半節に主語が現れ、前半節で差し押さえられる等位文は、その適格性に-j / -c と -aad⁴ とでは違いがあるのであるから、有標の文と言わざるを得ない。proの分布も、顕在的な主語の分布と並行していると考えれば、同じことが言えるであろう。NP₁が主語のくる優先的な位置である事実は、後述するトピックの一貫性の観察から更に強い支持を得るはずである。

3. 2. pro と談話の原則

Huang(1984)はproのコントロールについて、次のような規則を提示している。

(42) General Control Rule:

Coindex an empty pronominal with the closest nominal element.

この規則によれば、proは必ず音声上の実現形を備えた名詞的要素によって同定されなければならない。

van Dijk(1977)以来、談話は単に複数の文の寄せ集めではなく、相互に密接な意味の関連性をもった文の集合体であるという主張がなされてきた。

(43) a. _{s1} [Bi öčigdör delgüürt sine gutal, tsamts

1sg yesterday store-D / L new shoes-ø shirt-ø

avaxaar gereesee garlaa]. s2 [Baraanij

buy-ADJ. VN-INSTR house-ABL-RFL go out-PST department store

delgüür 7 tsagaas 20 tsagt 30 minut xürtel ajilladag]. s3 [Minij

time-ABL time-D/L minute until open-HBT lsg-G

gerees baraanij delgüür xol učraas bi 3 tsagaas 20

house-ABL department store near because 1sg time-ABL

minut öngörč bajxad garč avtobusand suuv].

minute pass-COOD. CNV be-ADJ. VN-D/L go out-COOD.

CNV bus-D/L sit-PST

"I left my house to buy new shoes and shirts at a store yesterday. The department store opens from 7:00 to 20:30. Since the department store is near from my house, when it became 20 minutes past 3:00, I left (my house) and got on a bus."

b. *s1 [Bi öcigdör delgüürees sine gutal, tsamts avaxaar gereesee garlaa]. s2

[Namajg teatr oxiod

1sg-ACC theatre-D / L go-ADJ. VN-D / L

bilet duussan bajv]. s3 [Bi öglöo ix tsaj uusan učir odoo tsaj

ticket sell out-PRF. VN be-PST morning much tea-ø drink-PRF.

uumaargüj bajna].

VN because now drink-like to-not be-NPST

"I left my house to buy new shoes and shirts at a store yesterday. When I arrived at the theatre, the tickets had sold out. Since I drank much tea this morning, I don't want to have tea now."

(43 a, b)は、どちらも同一の文で始まり、後に類似した構造の文が二つ続く談話であるが、容認性の度合いにかなりの開きがある。(43 a)が容認可能であるのは、三つの文が一貫して“baraanij delgüür”をめぐる談話が展開しているからである。言い換えるなら、この名詞句をトピックとして、談話が首尾

一貫した意味上のまとまりを見せているのである。一方、(43b)は、行為の主体の“bi”は三つの文に共通しているにもかかわらず、談話の中心となるべきトピックが文ごとに異なっていて、一貫していない。その結果、後続文を展開しそこねてしまい、容認性の低い談話を構成してしまう。

そこで、談話の首尾一貫性について、次のような原則をたてることができる。

(44) 談話の首尾一貫性の原則：

- ① 談話の首尾一貫性は、先行文脈の特定の要素を後続の文がトピックとして保持し、それを更に展開していくことで保証される。

「首尾一貫性の原則」を守るために、色々な言語上の手段が存在する。ここでは、「トピックの位置の原則」と「トピックの連続性の原則」を採り上げることにしよう。

談話の中では、先行文との意味上の首尾一貫性を保つため、後続文のトピック要素は文頭にくる傾向がある。

(45) a. _{s1} [Sūxbaatar aav eejdee ix xalamj̄taj xūūxed bajlaa.]

Sukhbator parents-D /L-RFL very helpful child be-PST

_{s2} [Sūxbaatar yanz būrijn aḡjil xijj̄ etseg exdee

various-G work-ϕ do-COOD. CNV parents-D / L-RFL

tusaldag bajv].

help-HBT be-PST

“Sukhbator was a very helpful child to his parents.

Sukhbator did various jobs and helped his parents.”

b. _{s1} [Mongol ardijn xubisgal 1921 ond yalsan].

people-G revolution year-D / L win PRF. VN

_{s2} [Ene xubisgalijg D. Sūxbaatar udirdav].

this revolution-ACC lead-PST

“Mongolian People’s Revolution won in 1921. This revolution D. Sukhbator led.”

c. _{s1} [Manaj surguulijn oyutnij bajr xičeelij̄n bajrnij ard

1pl-G school-G dormitory school building-G behind

bajdag]. s₂ [Tend manaj angijn Bat suudag].

be-HBT there classroom-G live-HBT

“Our school’s dormitory is behind the school building. There Bat, our classmate, lives.”

(45 a - c) は、S₁と S₂の二つの文から成る談話である。(45 a)では、S₁も S₂も “Süxbaatar” について述べている文なので、それが文の主語として文頭の位置を占めている。文の主語は、無標のトピックであるといってもよい。(45 b)では、S₁の主語 “xubisgal” を S₂でトピックとしているので、主語の後にくるはずの直接目的語が文頭に移動している。(45 c)では、S₁の主語の “oyuutnij bajr” を指示する “tend” が S₂のトピックである。場所の副詞は、主語の後にくるのが本来の語順である。

もし、S₁と S₂の間のトピックを介しての連結性を考慮に入れずに語の配置をしたなら、次のようなぎこちない談話が生ずることになる。

(46) a. ? Süxbaatar aav eejdee ix xalamjtaj xüüxed bajlaa. Yanz бүрийн ажлийг
Süxbaatar xijj etseg exdee tusaldag bajv.

b. ? Mongol ardijn xubisgal 1921 ond yalsan. D. Süxbaatar ene xubisgalijg
udirdav.

c. ? Manaj surguulijn oyuutnij bajr xičeelijн bajrnij ard bajdag. Manaj
angijn Bat tend suudag.

(45)と(46)から、次の原則を設定することができる。

(47) トピックの位置の原則：

先行文脈との間に談話上の首尾一貫性を保持するために、後続文のトピックは、文頭にくる。但し、それを妨げる積極的な理由のある場合は、そのかぎりではない。

談話中のトピックの分布は、中断せずに連続する傾向も観察される。

(48) a. s₁ [Batbayar 9-r angid bajxdaa neg amraltijn
ninth classroom-D / L be-ADJ. VN-RFL one holiday

ödör nōxōdtejgōō uuland zugaalaxaar

friend-COOD. CNV mountain-D / L take a walk-ADJ. VN-INSTR

yavjēe]. s₂ [Ter ödriñ öglōō salxigūj, tselmeg, dulaaxan

go-PRF that day-G morning wind-not clear warm

bajsan bolovč üdess xojš genet xūjten bolj salxi salxilav]. s₃[Batbayar

be-PRF. VN although afternoon suddenly cold become-COOD. CNV wind

blow-PST

nimgen xuvtsastaj yavsan učir ix daarč xanyaad xūrčee].

thin clothes-CMT go-PRF. VN because very feel cold-COOD. CNV a

cold-ø catch-PRF

"When Batbayar was in the ninth class, (he) went on an excursion to the mountain with his friends on one holiday.

Although, that morning, it was windless, clear and warm, in the afternoon, suddenly, it became cold and the wind blew.

Since Batbayar went out with thin clothes, (he) felt very cold and caught a cold."

- b. ? s₁ [Batbayar 9-r angid bajxdaa neg amraltijn ödör nōxōtejgōō uuland zugaalaxaar yavjēe]. s₂ [Dorj tend moryoor očiv].

there horse-INSTR go-PST

s₃ [Batbayar nimgen xuvtsastaj yavsan učir ix daarč xanyaad xūrčee].

"When Batbayar was in the ninth class, (he) went on an excursion to the mountain with his friends on one holiday. Dorj went there on a horse.

Since Batbayar went out with thin clothes, (he) felt very cold and caught a cold."

- c. * s₁ [Batbayar 9-r angid bajxdaa neg amraltijn ödör nōxōdtejgōō uuland zugaalaxaar yavjēe]. s₂ [Dorj tend moryoor očiv]. s₃ [Mori ni xurdañ gūjlee]. s₄ [Batbayar nimgen xuvtsastaj yavsan učir ix daarč xanyad

horse his fast run-PST

xürčee].

“When Batbayar was in the ninth class, (he) went on an excursion to the mountain with his friends on one holiday. Dorj went there on a horse. His horse ran fast. Since Batbayar went out with thin clothes, (he) felt very cold and caught a cold.”

(48 a) は “Batbayar” を中心に談話が展開している。S₂は背景となる文であるが、S₁の時の副詞句 “neg amraltijn ödör” を取り上げて状況説明をすると同時に、S₃の内容の伏線ともなっている。したがって、前景文の S₁と S₂のトピック “Batbayar” との連続性が破られるようなことはない。

一方、(48 b) の S₂には、“Dorj” という S₁の “Batbayar” と競合するトピックが存在している。そのおかげで S₁と S₃のトピックの連続性は破られ、容認性の度合いの落ちる談話ができあがってしまう。

(48 c) のように、S₂内の名詞 “mori” をトピックとして展開する文 S₃が介入してくると、S₁と S₄との連続性はほとんど感じられなくなってしまう、一つの談話の中に別の談話が挿入されたという印象を与える。

(49) トピックの連続性の原則：

トピックの連続性が密であればあるほど、談話上の首尾一貫性は強化される。

トピックの位置の原則(47)とトピックの連続性の原則(49)を踏まえて、pro の指示対象の特定化について考えてみることにしよう。

(50) a. _{s1} [Ivanov_i odoo xorin nastaj]. _{s2} [pro_i Moskva xotijn
now twenty age-CMT Moscow city-G
neg üjldvert ajilladag].

one factory-D / L work-HBT
“Ivanov_i is 20 years old now. (he_i) works at a factory in Moscow.”

b. ?_{s1} [Ivanov_i odoo xorin nastaj]. _{s2} [Ax_j ni
elder brother his

setgüülč]. s₃ [pro_i Moskva xotijn neg üjldvert ajilladag].

journalist

“Ivanov_i is 20 years old now. His_i elder brother_j is a journalist. (He_i) works at a factory in Moscow.”

c. * s₁ [Ivanov_i odoo xorin nastaj]. s₂ [Ax_j ni setgüülč].

s₃ [Düü nar_k ni dund surguulid surdag].

younger brother PL his high school-D / L study-HBT

s₄ [pro_i Moskva xotijn neg üjldvert ajilladag].

“Ivanov_i is 20 years old now. His_i elder brother_j is a journalist. His_i younger brothers_k study at high school. (He_i) works at a factory in Moscow.”

(50 a) の pro の指示対象は、直前の文 S₁ の主語 “Ivanov” である。(50 b) のように、pro と指示対象との間に異なる主語をもつ文 S₂ が介入すると、談話上の容認性の度合いが低くなる。pro の指示対象の候補として S₂ の主語 “ax ni” を選べる可能性が出てくるからである。(50 c) のように、更に別の主語をもつ文が加わると、当然、競合する pro の指示対象の候補が増えるわけであるから、“Ivanov” を唯一的に選ぶことがほとんど困難になる。pro の指示対象の特定化には、(50) で観察した一般的な制約の他に、二つの特有の制約がかかる。

第一の制約は、指示対象は主語以外の名詞句であってはならないということである。

(51) a. s₁ [Bilig_i Ulsijn töv muzej_j üzexeer

state-G center museum-ACC see-ADJ. VN-INSTR

Ulaanbaatar xotod irlee]. s₂ [Tend pro_i taksind

Ulan Bator city-D / L come-PST there taxi-D / L

suuj e_i xotijn töv ruu yavav].

get on-COOD. CNV city-G toward go-PST

“Bilig_i came to Ulan Bator to see the National Central Museum_j. There (he_i) caught a taxi and went to the center of the city.”

- b. *_{s1} [Biligi_i Ulsijn töv muzej_j uzexeer Uaanbaatar xotod irlee]. _{s2}[pro_j
 <<Manaj ornij üjldver>><<Soyol
 1pl-G country-G industry culture
 urlag>><<BNMAU-ijn gadaa xariltsaa>> zereg olon art
 MPR-G foreign relationship and so on many
 xesegtej yom].
 part-CMT PRD
 “Biligi_i came to Ulan Bator to see the National Central
 Museum. It_j has many sections such as ‘the industry of our
 Country’, ‘Culture and Fine Arts’ and ‘the Foreign Relationship
 of MPR’.”

(51 a) の pro の指示対象は、S₁の主語“Biligi”であるので、適格の判定が得られる。ところが、(51 b) の pro は S₁の直接目的語が指示対象であると解釈されるために不適格となる。

第二の制約は、pro の指示対象は常に先行文脈にあるのであって、後続の文脈にあってはならないということである。

- (52) a. _{s1} [Bat_i nomijn delgūūrees oros mongol toli
 book-G store-ABL Russian Mongolian distionary-
 avlaa]. _{s2} [Oroj pro_i kino üzlee].
 buy-PST evening movie-
 “Bat_i bought a Russian-Mongolian dictionary at a book store. (He_i) saw a
 movie in the evening.”
 b. *_{s1} [pro_i nomijn delgūūrees oros mongol toli avlaa].
_{s2} [Oroj Bat_i kino uzlee].

(52 a) は、pro の指示対象の“Bat”が先行文にあるので適格であるが、(52 b) はそれが後続文にあるので不適格である。

(50)、(51)、(52)の観察から、pro の指示対象の特定化に関して、次のような原則を引き出すことができる。

(53) 近接性の原則：

pro は最も近接する先行文脈内の実現形をもった主語 NP を指示対象とする。

この原則は、主語の実現形に行き当たるまで、先行文脈を遡ることが許されるということを含意している。

(54) s₁ [Bi_i end ireed e_i Xubisgalijn muzejg üzsen].

Isg here come-COOD. CNV revolution-G museum-ACC see-PRF. VN

s₂ [pro_i öör muzej üzeegüj]. s₃ [pro_i odoo Ulaanbaatar

other museum-Ø see-IMPRF-not now Ulan Bator

xotijn muzej üzmeer bajna].

city-G museum-Ø see-like to be-NPST

"I came here and saw the Revolution Museum. (I) haven't seen the other museums yet. (I) want to see the Ulan Bator City Museum."

S₃の pro は直前の文 S₂の pro と同一指示的である。この S₂の pro は、S₁の照応的空要素 e と同一指示的である。けれども、近接性の原則(53)により、S₂の pro も S₁の e も、S₃の pro の指示対象にはなれない。S₃の pro にとって最も近接する先行文脈内の実現形をもった主語 NP は、S₁の主語 "Bi" である。"Bi" は S₃の pro の指示対象であるが、それは遡及的に探索されることで見出されるのである。観点を変えると、[bi_i e_i pro_i pro_i]のように先行詞となる主語 NP から S₃の pro に至るまで、同一指示性の連鎖を構築することになる。

「近接性の原則」について忘れてはならないもう一つのことは、この原則が他の談話の原則を前提にして初めて効力をもつという事実である。「近接性の原則」、「トピックの位置の原則」、「トピックの連続性の原則」、「談話の首尾一貫性の原則」の間には、次のような依存関係を見ることができる。

(55) 談話の首尾一貫性の原則 > トピックの位置の原則、トピックの連続性の原則 > 近接性の原則

pro は、いわば、無標のトピックであるわけだが、トピックが文頭に来やすいということと、先行文脈との間でトピックが連続しているということが前提

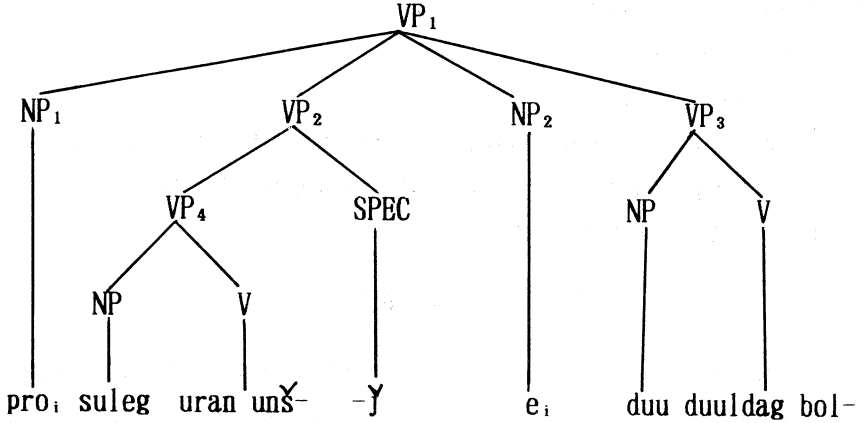
になって初めて、適切な指示対象に辿り着けるということが保証されるのである。これらの原則は相互に依存し合いながら、談話の首尾一貫性を成立させるために働いているのである。

さて、pro と指示対象を結ぶ原則を突き止めたのであるから、次に、3. 2 節の冒頭であげた(30)のタイプの主語の省略を具体的に説明していくことにしよう。便宜上、(30)を (56)として再提示する。

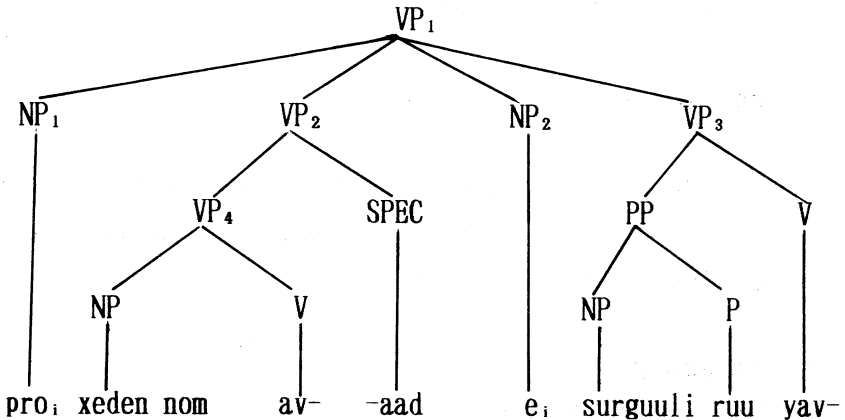
- (56) a. s_1 [Suragč_i buxen nom unšij_i, e_i bičig
 student all book- \varnothing read-COOD. CNV composition- \varnothing
 bičij_i čaddag bolov]. s_2 [Bas pro_i
 write-COOD. CNV be able to-HBT become-PST moreover
 sūleg uran unšij_i e_i duu duuldag bolloo].
 poem- \varnothing recite-COOD. CNV song- \varnothing sing-HBT become-PST
 “All the students_i came to be able to read a book and write composition.
 Moreover, (they)_i came to recite a poem and sing a song.”
- b. s_1 [Bid_i Batijn tasgaas garč, e_i nomijn delgüürt
 1pl-G room-ABL go out-COOD. CNV book- \varnothing store-D / L
 očloo]. s_2 [Tendeas pro_i xeden nom avaad e_i
 go-PST there-ABL a few book- \varnothing buy-COOD. CNV
 surguuli ruu yavav].
 school toward go-PST
 “We left Bat’s room and went to the book store. There (we) bought several books and went to school.”

S_2 に注目して頂きたい。等位文の前半節の主語の位置に pro が、後半節の主語の位置に照応的な空要素が入っている。統語構造は、次のようになる。

(57) a .



b .



(57 a, b) は、NP₁の pro と NP₂の e とが同一の指標を有し、pro が e を C 統御しているので、pro は e を正しく束縛している。NP₂は NP₁により束縛されているので、NP₁の pro と同一指示的な実現形やもう一つの pro をもってはいらない。

次に、NP₁の pro は近接性の原則(53)に従って、先行文脈内に指示対象を求める。S₁内の照応的な空要素を手掛かりに遡ることで、最も近接する主語 N

P “suragč” と “bid” にそれぞれ辿り着くのである。pro の特定化の過程において、次のような連鎖が形成されることになる。

(58) a. [suragč_i, e_i, pro_i]

b. [bid_i, e_i, pro_i]

(56)のように、顕在的な主語のまったく現れない等位文も、束縛という統語上の原則と近接性の原則という談話上の原則とが相補い合う形で働くことで、余す所なく説明できるのである。

4. 結び

2節、3節で見たように、モンゴル語の等位文の主語の省略は、削除ではなく差押えと呼んでよいような現象である。差押えが発動するためには、統語上の原則と意味上の制約、及び、談話上の原則が整わなければならなかった。まとめとして、もう一度、それらの原則や制約を列挙しておこう。

I. 統語上の原則

(59) 主語の差押えの原則：

同一指示的な主語NPが相互にC統御し合う関係にある場合、その実現形は、どちらか一方のNPの下にだけ現れればよい。残りのNPの下には、非語彙的な照応的要素eがおかれる。

II. 意味上の制約

(60) -j / -č と -aad⁴ の意味特性：

a. -j / -č：一つの行為や事態の連続性が異なる行為や事態の同時性を表示する。

b. -aad⁴：一つの行為や事態の継起性を表示する。

III. 談話上の原則

(61) pro は、最も近接する先行文脈内の実現形をもった主語NPを同一指示対象

- ii. *e_i emčijn bičij ōgsōn joroor em uugaad [Batbayarijn_j biye]_k udalgūj zūgeer bolljee.

“(Someone else) took the medicine which the doctor prescribed, and Batbayar’s body shortly recovered.”

- 7) -xad⁴ 節と主節の主語が異なる場合、一般に -xad⁴ 節の主語は対格形になる。

- 8) 「統率 (government)」の定義は、Chomsky(1981)、Manzini(1983) などに従う。

- i. β is governing category for α iff

a. β is the minimal category containing α and a governor for α , and

b. β contains a SUBJECT accessible to α .

ここで、“minimal category”はNPかSを指し、“SUBJECT accessible to α ”は語彙的な主語NPか、Iに支配された要素 (e. g. Agr (eement)) を指す。(14)をiの定義に照らしみると、SがV₁にとっての統率範疇、Iが統率子、NP₁、NP₂が接近可能な主語ということになる。

- 9) 「非語彙的な照応語」を設定する蓋然性はかなり高いように思われる。Chomsky(1981)は空要素として、NP-trace[pronominal, + anaphor]、pro[+ pronominal, -anaphor]、variable[pronominal, -anaphor]、PRO[+ pronominal, + anaphor]の分類を提案しているが、このうちPROは、理論上の妥当性はあるかもしれないが、実証的な妥当性には乏しい。元来、[+ pronominal]と[+ anaphor]という二つの素性は相互排他的であって、両者を併せることは、必然的に自己矛盾を内包することになる。Chomskyはこの矛盾を回避する手立てとして、次のような原則をたてる。

- i. PRO is ungoverned.

けれども、具体的な言語事実は、Manzini(1983)やHuang(1989)が指摘している通り、PROは[-pronominal, + anaphor]か[+ pronominal, -anaphor]のどちらか一方に吸収されるか、もしくは両者に分割されるかであると考えられる。

束縛条件(17)に従うと、次のような分類が可能であるように思われる。

- ii. a. anaphor : lexical (Reflexive-Possessive suffix, Reflexive

NP)

nonlexical (NP-trace, null subject NP)

- b. pronominal : lexical(pronoun)

nonlexical (pro)

- c. R-expression

従来、PROとみなされていたものは、NP-trace以外の nonlexical anaphor か、nonlexical pronominal (e. i. pro) に帰属すると考えられる。詳細については、今後の研究に委ねたい。

- 10) Işdorj 氏 (personal communication) も同様の指摘をしておられる。

- 11) 付加する語の母音に従って、-aa / -ee / -oo / -öo の4つの交替形をもつ。

- 12) 付加する語幹母音に応じて、-xad / -xed / -xod / -xöd と交替する。

- 13) 副詞節と主節の主語が異なる場合、[+ human]で前者の主語は対格形をとる。

- 14) Chung(1989)もChamarro語の照応語について同様の制約をたてている。

i. Chamorro anaphors must be bound by the subject.

15) Huang(1989) では、この規則は改訂され、“Generalized Control Rule”として定式化されている。

i. Generalized Control Rule(GCR):

An empty pronominal is controlled in its control domain (if it has one).

“control domain” は、次のように定義される。

ii. Domain \equiv def.

α is the control domain for β iff it is the minimal category that satisfies both (a) and (b):

a. α is the lowest S or NP that contains (i) β , or (ii) the minimal maximal category containing β ,

b. α contains a SUBJECT accessible to β .

i と ii は、pro が “a local, unique nonarbitrary antecedent” をもつような環境を指定する。もし pro が control domain をもたない場合には、i と ii の方式でコントロールされる必要はなくなり、“long distance” をもつことになる。i と ii で指定されない pro の先行詞は、何らかの pragmatic な要因によって決定されなければならないのだから、結局、以下での論議に、GCR はまったく影響を与えないことがわかる。

〔謝辞〕

本論文の執筆にあたって、データに関する煩雑な質問に丁寧に答えて下さった INDIANA 大学客員教授 T. S. Isdorj 氏に深く謝辞を表明したい。氏の御教示がなかったなら、本論文を完成させることはできなかったであろう。勿論、誤りはすべて著者自身の責任であることは言を俟たない。

〔省略記号〕

1 : the First Person
2 : the Second Person
3 : the Third Person

sg : singular
pl : plural

ABL : Ablative
ACC : Accusative
ADJ.VN : Adjective Verbal Noun
CMT : Comitative
COORD. CNV : Coordinative Converb
CSTV:Causative
D / L : Dative-Locative
G : Genitive
HBT : Habitual

NPST : Nonpast
RFL : Reflexive-Possessive
PRD : Predicate Particle
PRF : Perfective
PRF. VN : Perfective Verbal Noun
PST: Past
VLNT : Voluntative
 $\epsilon_{\text{IMPTV.2P}}$: Second Person Imperative
 ϵ : Zero Case

IMPRF : Imperfective

INSTR : Instrumental

References

- Chomsky, N.(1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- Chung, S.(1989) "On the Notion 'Null Anaphor'in Chamorro," In(eds.) Jaeggli, O. & K. J. Safir : 143-184.
- 福井直樹 (1989) 「句構造の理論と比較統語論」 言語18 : No. 7, 94-102, No 8, 90-95, No 9, 96-100, No10, 94-99.
- Goodall, G.(1987) *Parallel Structures in Syntax*. Cambridge University Press.
- Hankamer, J.(1979) *Deletion in Coordinate Structures*. Garland Publishing, Inc.
- Huang, C. T. J.(1984) "On the Distribution and Reference of Empty Pronouns," *Linguistic Inquiry* 15 : 531-574.
- _____.(1989) "Pro-Drop in Chinese : A Generalized Control Theory," In-(eds.) Jaeggli, O. & K. J. Safir : 185-214.
- Jaeggli, O and K. J. Safir. (eds.)(1989) *The Null Subject Parameter*. Kluwer Academic Publishers.
- Luvsanjav, C, et al.(1976) *Mongol Xel Surax Bicig*. Ulan Bator.
- Manzini, M. R.(1983) "On Control and Control Theory," *Linguistic Inquiry* 14 : 421-446.
- _____.(1985) "On Control and Binding Theory," *NELS* 16 : 322-337.
- 小沢重男 (1986) 増補モンゴル語四週間. 大学書林.
- Reinhart, T.(1983) "Coreference and Bound Anaphora : A Restatement of the Anaphora Questions," *Linguistics and Philosophy* 6 : 47-88.
- Van Dijk, T, A.(1977) *Text and Context : Explorations in the Semantics and Pragmatics of Discourse*. Longman.